



Title	アフマド・ハーンのイギリス旅行記について
Author(s)	松村, 耕光
Citation	言語文化研究. 2015, 41, p. 149-161
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51431">https://doi.org/10.18910/51431</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## アフマド・ハーンのイギリス旅行記について

松村 耕 光

### Ahmad Khan's Accounts of His Travel to and Stay in England

MATSUMURA Takamitsu

**Summary** : Sayyid Ahmad Khan (1817-1897), an energetic reformer of Indian Muslim society and rationalist interpreter of Islam, went to London in 1869. He wrote about the journey in his letters and a travelogue entitled “*Musāfirān-e London (The Visitors to London)*”. In these documents, Sayyid Ahmad Khan not only described his experience minutely and interestingly in straightforward Urdu but clearly expressed his opinion that the Indian Muslims, one of the most backward communities in the world, should obtain useful knowledge from European civilization which had nothing to do with Christianity, by the medium of Urdu, the *lingua franca* of India, on the basis of self-help.

キーワード：アフマド・ハーン、イギリス旅行記、インド・ムスリム

はじめに

1869年、バナレスで判事 (assistant district magistrate) を務めていたアフマド・ハーン (Ahmad Khān 1817-1897) は二人の息子ハーミド (Hāmid b. 1849) とマフムード (Maḥmūd b. 1850) とロンドンに赴いた<sup>1)</sup>。北西州 (North-Western Provinces) 政府の奨学生にマフムードが選ばれ<sup>2)</sup>、ケンブリッジ大学に留学するのに同行したのである<sup>3)</sup>。

1) Khudādād Bēg (アフマド・ハーンの親戚) も一行に加わっていた。Chajjū という使用一人も同行した。

2) 9名の者に奨学金6000ルピーと渡航費3000ルピーを与えるという奨学金制度であった。

3) アフマド・ハーンは、渡英の目的を休暇願の中で次のように述べている。

「インドに大きな繁栄をもたらし、イギリス政府が目指している諸目的を達成するためには——イギリス政府のために働いていることを私は名誉と思っています——、ヨーロッパとインドの人々の関係を深めればよいと考えています。この目的を達成するためには、インドの人々に対してヨーロッパを訪問するよう働きかけることが必要であると思います。西洋諸国の文明の素晴らしい成果やその進歩を自分の目で見るができるでしょうし、イギリスの人々がどれほど豊かで力強く、賢明であるか、理解できるでしょう。(…) 自らイギリスに行くことによって私は自国の人々の先駆けとなりたいと思っています。この旅行は私に裨益するところがあるばかりでなく、私の経験を伝えて人々にも裨益することがあるようにしたいと願っています。私が学んだ有益な事柄を教えて、人々が私の例に倣ってくれることを望んでいます。」(Asghar 'Abbās, ed., *Sir Sayyid kā Safar-nāmah Musāfirān-e London*, Aligarh, 2009, pp. 227-228.)

ハーリーよれば、アフマド・ハーンの渡英には、ウィリアム・ミューア (William Muir 1819-1905) のムハンマド伝 *The Life of Mahomet*——第1巻と第2巻は1858年に、第3巻と第4巻は1861年にロンドンで出版された——に反駁する

青年期に周囲の反対を押し切ってイギリス東インド会社に勤務し、「西洋」に或る程度慣れていたアフマド・ハーンにとっても、この初めての西洋旅行、1年数か月に及ぶイギリス滞在は、新鮮な驚きをもたらし、思索を深める契機となったと思われる<sup>4)</sup>。この時期にアフマド・ハーンがウルドゥー語でインドに書き送った文書類は<sup>5)</sup>、1961年にイスマーイール・パーニーパッティー (Shaikh Muḥammad Ismā'il Pānīpatī) の編集で、『ロンドン訪問者たち (Musāfirān-e London)』という題名で一書にまとめられ、ラホール の Majlis-e Taraqqī-e Adab より出版された<sup>6)</sup>。本書に収められた文書類は以下の通りである。

文書1 アフマド・ハーンのイギリス渡航記：ロンドン到着までの渡航記 (pp. 27-160) 及び「偏見を持つ、あるいは正しき信仰を持つ者たちの旅についての知らせ」という見出しの付いた文章<sup>7)</sup> (pp. 160-

ための資料収集という目的があった (Altāf Husain Hālī, *Ḥayāt-e Jāvid*, New Delhi, 1979 [originally published in Kanpur in 1901], p. 147)。当時、ミュアは北西州知事であったので(在任期間 1868-1874年)、この目的は公にはされていなかった。アフマド・ハーンの渡英は物見遊山を目的としたものではなく、大きな使命感に駆られたものであった。

<sup>4)</sup> 滞英中の行動は、断片的にしか解らないが、ハーリーの『永遠の生命 (*Ḥayāt-e Jāvid*)』や G. F. I. Graham, *The Life and Work of Sir Syed Ahmed Khan*, Karachi, 1974 [originally published in Edinburgh in 1885] によると、アフマド・ハーンは、1869年8月6日に the Companionship of the Star of India の称号を授与され、1870年3月11日にはヴィクトリア女王と面会している。帰国直前には皇太子にも謁見している。トーマス・カーライルにも会ったようである。ロンドン以外にアフマド・ハーンはプリストル、クリフトン (1870年3月1日から4日まで) やケンブリッジ (年月日不明) も訪問している。また、ロンドン滞在中には、English education では多くの人に知識が行きわたらない、vernacular education はレベルが低いなどとインドの公教育を批判する内容の、“Strictures upon the Present Educational System in India” と題する論文を発表したり (1869年)、12の「講話 (khubbah)」から成る *Khubāt-e Ahmadiyah* というミュアの上記書物第1巻を論駁する書物をウルドゥー語で書き、それを英訳させた *A Series of Essays on the Life of Mohammed* を出版したりしている (1869年から1870年にかけて1章ずつ出版したようである。ウルドゥー語版は、*Al-Khubāt al-Ahmadiyah fi al-'Arab wa al-Sīrat al-Muhammadīyah* という題名で、アフマド・ハーンの宗教的著作をまとめた *Tasānīf-e Ahmadiyah* 第2巻——1887年にアリーガルで出版された——に収められている。英語版よりウルドゥー語版の方が詳しく書かれている)。イギリスでアフマド・ハーンはきわめて多忙で充実した日々を送ったものと思われる。

復路の旅程ははっきりしていないが、アフマド・ハーンは息子のハーミドと1870年にインドに戻っている (使用人 Chajjū は、マフムードとともにイギリスに残った)。1870年6月17日付の書簡には、8月28日にロンドンを出発、9月2日にマルセイユからアレクサンドリアに向かい、1週間、エジプトに滞在して、9月16日にスエズからボンベイに向かい、10月2日にボンベイ到着の予定、と記されている (Shaikh Muhammad Ismā'il Pānīpatī, ed., *Musāfirān-e London*, Lahore, 1961, pp. 263-264)。ハーリーによれば、ロンドンを出発したのは、1870年9月4日で、10月2日にボンベイ到着、同月、ペナレスに帰着している (Altāf Husain Hālī, *op. cit.*, pp. 160-161)。

<sup>5)</sup> インドに書き送られたイギリス旅行に関する文章は、アフマド・ハーンが設立した科学協会 (The Scientific Society) ——アフマド・ハーンが任地ガーゼーブル (Ghāzīpur) で1864年に設立した、啓蒙活動や西洋書籍のウルドゥー語への翻訳活動を行う団体——の機関紙 *The Aligarh Institute Gazette* (1866年発刊) やアフマド・ハーンが1870年12月24日に発刊した雑誌『道徳の純化 (*Tahdhīb al-Akhilāq*)』に掲載された。ロンドン訪問記の原稿は1870年3月11日にまとめられ、『ロンドン訪問者たちの旅行記 (*Safar-nāmah-e Musāfirān-e London*)』という題名で出版される筈であったが (Shaikh Muhammad Ismā'il Pānīpatī, ed., *op. cit.*, p. 1)、発表した文章が大きな反感を買っていたために出版に至らなかった (インド人は動物以下と述べたことやキリスト教徒の調理した肉を食べたことが非難された)。

<sup>6)</sup> 本書は1996年に、Aligarh Muslim University Old Boys' Association によってカラチで再刊されている。旅行記や書簡を時系列に並べて英訳したもの (Mushirul Hasan & Nishat Zaidi, tr., *A Voyage to Modernity*, Delhi, 2011) もある (若干文書が増補されている)。アリーガルには Asghar 'Abbās, ed., *Sir Sayyid kā Safar-nāmah Musāfirān-e London*, Aligarh, 2009 が出版されている。イスマーイール・パーニーパッティー編集版の渡航記は、雑誌『道徳の純化』(ヒジュラ歴1298 [西暦1881]年シャワール-ラマザン月号) に採録されたものに基づいているが、アスガル・アッパース編集版は *The Aligarh Institute Gazette* に掲載されたもの——12回に亘って連載された——に基づいている (アスガル・アッパース編集版には、*The Aligarh Institute Gazette* に掲載された、アフマド・ハーンのイギリス旅行に関係する23の文書が採録されている——この中の二つの文書は、イスマーイール・パーニーパッティー編集版に収録されているものと共通である——)。本稿では、広く流布しているイスマーイール・パーニーパッティー編集版の *Musāfirān-e London* を基本テキストとして用いることにする。

<sup>7)</sup> 文書1は、アスガル・アッパースによれば *Musāfirān-e London* という題名で12回に亘って以下の日付の *The Aligarh Institute Gazette* に掲載された。

第1回 1869年4月30日、第2回 1869年5月7日、第3回 5月14日 (アスガル・アッパース編集版では12日と誤記されている)、第4回 5月21日、第5回 6月11日、第6回 6月18日、第7回 6月25日、第8回 7月2日、第9回 7月9日、第10

179)

- 文書 2 (付録 1) 「イギリス滞在最初の6か月について」<sup>8)</sup> —— 科学協会事務局長  
ラジャー・ジャイ・キシヤンダース (Rājā Jai Kishandās) 宛  
1869年10月15日付<sup>9)</sup> 書簡—— (pp. 180-199)
- 文書 3 (付録 2) アフマド・ハーンの協力者ハーリー (Alṭāf Ḥusain Ḥālī 1837-  
1914) が書いたアフマド・ハーン伝『永遠の生命』のロンドン訪  
問に関する部分の抜粋<sup>10)</sup> (pp. 200-217)
- 文書 4 (付録 3) アフマド・ハーンの協力者メフディー・アリー (Maulavī Sayyid  
Mehdī 'Alī 1837-1907)<sup>11)</sup> 宛書簡集<sup>12)</sup> (pp. 218-267)
- 文書 5 (付録 4) イギリスの Athenaeum Club<sup>13)</sup> に関するアフマド・ハーンの見  
聞文 (ヒジュラ歴1297年ラジャブ月の『道徳の純化』に掲載) (pp.  
268-278)
- 文書 6 (付録 5) ゴーラクプルのミッシヨナリー・スクールで行った、ヴィクトリ  
ア女王生誕記念日での講演 (1874年 5月29日) (pp. 279-291)
- 文書 7 (付録 6) ロンドン滞在中のアフマド・ハーンに宛てたフランスの東洋学者  
ギャルサン・ド・タッスイー (Garcin de Tassy 1794-1878)<sup>14)</sup> の  
1869年 7月17日付ウルドゥー語書簡 (pp. 292-295)

## アフマド・ハーンのイギリス旅行記

アフマド・ハーンは、1869年4月1日にベナレスを出発して、以下のような旅程でロンドンに向かった。

4月1日 (木) : ベナレス出発。

4月2日 (金) : アラハバード到着。北西州知事ウィリアム・ミューアと面会。夜行列車でジャバルプルへ向かう。

回 7月16日, 第11回 8月27日, 第12回 1870年 3月11日 (アリーガル・ムスリム大学図書館で1869年の *The Aligarh Institute Gazette* は確認できたが, 1870年のものは見つからなかったため, 第12回に関しては日付を確認することができなかった)。

<sup>8)</sup> アスガル・アッパース編集版では, 「ロンドンからの科学協会事務局長宛書簡」というタイトルになっている。この文書は1869年11月19日付の *The Aligarh Institute Gazette* に掲載されたが, イスマーイール・バーニーパッティー編集版のテキストは, パンジャブ教育局の月刊刊行物 *Atāliq-e Panjāb* に転載されたものに基づいている。

<sup>9)</sup> アスガル・アッパース編集版でも1869年10月15日付となっているが, 英訳 *A Voyage to Modernity* では11月9日付となっている。

<sup>10)</sup> 『永遠の生命』は, アフマド・ハーンの生涯を扱った第1部と彼の業績を扱った第2部から成り, 第1部は英訳されている (K. H. Qadiri and D. J. Matthews, tr., *Hayat-i-Javed*, Delhi, 1979)。

<sup>11)</sup> ハイデラバード藩王国より与えられた Nawāb Muhsin al-Mulk という称号で呼ばれることが多い。

<sup>12)</sup> 24通の書簡 (最初の書簡は1869年4月16日付, 最後の書簡は1870年 7月 8日付) が収められている。

<sup>13)</sup> Athenaeum Club はロンドンで1824年に創立された知識人の社交組織。アフマド・ハーンはこのクラブの名誉会員であった。

<sup>14)</sup> ギャルサン・ド・タッスイーは, アフマド・ハーンのウルドゥー語で書かれた, デリー遺跡や著名人に関する著作 *Āthār al-Ṣanādīd* (1847年) をフランス語訳 (部分訳, 1860年, バリ) している。

4月3日（土）：ジャバルプル到着。午後8時、牛車で出発（列車に乗れなかったのだ）。

ナーグプルへ向かう。

4月6日（火）：ナーグプル到着。

4月7日（水）：列車でナーグプル出発

4月8日（木）：正午、ボンベイ到着。

4月10日（土）：午後6時、蒸気船バローダー号で出港<sup>15)</sup>。

4月17日（土）：早朝、アデン到着。同日午後5時、アデン出発。

4月23日（金）：午前7時、スエズ到着。午後、スエズ出発。鉄道でアレクサンドリアへ向かう。

4月24日（土）：正午頃、蒸気船プーナ号でアレクサンドリア出発<sup>16)</sup>。

4月29日（木）：夜、マルセイユ到着。

5月1日（土）：マルセイユ出発。リヨン経由でパリに向かう。

5月2日（日）：午前7時30分、パリ到着。

5月4日（火）：午前8時、鉄道でパリ出発、カレーへ向かう。英仏海峡を渡る。ドーヴァーから鉄道でロンドンへ向かい、午後7時、チャーリング・クロス駅に到着。

1869年4月1日のベナレス出発から5月4日のロンドン、チャーリング・クロス駅到着までの旅が記録された渡英記（文書1）には、鉄道や船の設備、船内の食事や船内での暮らし、立ち寄った町の様子などが詳しく記録されており、アフマド・ハーンの旅を具体的に追体験することができる。文書1に収められている「偏見を持つ、あるいは正しき信仰を持つ者たちの旅についての知らせ」という見出しの付いた文章には、1870年3月1日から4日までのプリストル、クリフトンへの小旅行の様子が、文書2（付録1）「イギリス滞在最初の6か月について」には、アフマド・ハーンの下宿の様子やロンドンでの生活ぶりやロンドンで感じたこと、考えたことが詳しく記述されている。このような具体性、記録性がアフマド・ハーンの旅行記（文書1及び文書2）の一つの大きな特徴であるが<sup>17)</sup>、その最大の特徴は過剰なまでの改革者意識に起因する思想性であると思われる。以下、アフマド・ハーンの旅行記に見られる重要な論点について検討してみることにしたい。

### (1) 西洋礼讃

アフマド・ハーンの旅行記は、露骨なまでの——自虐的なまでの——西洋賛美、インド卑下が随所で見られる、西洋賛美、インド批判の書であると言っても過言ではない。アフマド・ハー

<sup>15)</sup> 船中で著名な女性解放運動家 Mary Carpenter (1807-1877) と会い、話をしている。

<sup>16)</sup> 船中でレセップスと会い、話をしている。

<sup>17)</sup> アフマド・ハーンの旅行記の具体性、記録性は、渡英する者の役に立つようにという配慮に基づくものであると思われるが、アフマド・ハーンの旺盛な好奇心や新鮮な驚きを示しているようにも感じられる。

ンは、イギリス人とインド人を比較して、前者を「有能で美しい人間」とするなら、後者は「不潔な野生動物」であるとまで記している。

「我々インド人はイギリス人を非常に不道德であると見做し——今でも私はこの非難を取り消す気はありませんが——こう言っていました——イギリス人はインド人を動物であると思っている、きわめて卑しい存在であると考えている、と。これは我々の間違いでした。そう思い込んでいるのではなく、実際に我々はそのような存在なのです。」(p. 183)

「私は誇張することなく、きわめて率直にこう言えます——すべてのインド人は、貴賤を問わず、貧富を問わず、商人から職人に至るまで、博学な識者から無学な者に至るまで、教育を受けて文明的なイギリス人に比べると、きわめて有能で美しい人間の前のきわめて不潔な野生動物のようなものである、と。動物は尊重されるに値するでしょうか。動物に対する態度が道徳的であるとか、不道德であるとか考えるでしょうか。決して考えないのです。したがって、イギリス人が我々インド人をインドの野生動物のように考えても我々はどうしようもないのです——正当な理由があるのですから。」(pp. 183-184)

「インドでイギリス人がインド人と接しているのは、インド人と付き合い、インド人を丁重に扱えという政府の政策に従っているからです。そうでなければ、インド人とイギリス人を一つの自由な国に住ませたならば、そしてインド人の習慣、生活方法が今と同じで、イギリス人のそれらも今と同じとするなら、イギリス人はインド人のそばには来ないし、インド人を動物以上の存在とは見做さないことでしょう。」(pp. 189-190)

興味深いのは、アフマド・ハーンのイギリス人賛美が、抽象的な比較論で終始していないということである。アフマド・ハーンは、自分の下宿先の主人が物知りで学問好きであること、その夫人が上品で教養があり、夫人の二人の妹も教養があること、メイドも教養があり、てきぱきと効率よく働くことなど、具体的事例を挙げてイギリス人の優秀さを賛美しているのである。たとえば下宿のメイドに関してアフマド・ハーンは以下のように記述している。

「下宿の親切な女主人は我々のために二人のメイドを置いてくれました。一人はアン・スマイス (Anne Smith)、もう一人はエリザベス・マシューズ (Elizabeth Matthews)。後者は若く、貧しい少女で様々な仕事をこなします。前者はとても賢く、有能で、教育があります。きれいな文字を書き、分別があります。本を読むことができ、必要なことは何でも文章にすることができます。新聞を読むことができ、新聞を愉しむことができるのです。機械や時計が何の狂いもなく正確に動くように自分の仕事をきちんとこなすのです。」(pp. 194-195)

マルセイユやパリの以下のような具体的で細密な描写もまた、具体的に西洋の優越性——夜の明るさ、整然とした美しさ、清潔さに象徴されている——を明確に印象付けるものとなっている。

「(港からホテルに行く) 途中、マルセイユの町を通った。夜だった。初めて見たヨーロッパの町であった。乗り合いバスが商店街に着くと、私たちは狂人のようにあたりを見回した。このように整然とした商店街がこのように照明の明かりで輝いているのを見たことがなかった。インドのディーワリーの明かりなど比べ物にならなかった。通りに面した商店の入り口は非常に美しく、大きなガラスのドアとガラスの仕切りが取り付けられていた。ガラスは10フィートの大きさで、大きいものも小さいものもあった。ドアはたいてい1枚のガラスでできており、店に飾られた商品は外からよく見えた。美しく配置されていて、庭園のようであった。店にはランプ、天井灯、シャンデリアが、道にはとても美しいランタンがガスの炎で輝いていた。その光はガラスに反射して見事な光景を見せていた。町がこのように整然としているとは思ってもよらなかったのも——インドでは貴族の邸宅ですらこのように整然としているのを見たことがなかったのも——私たちはこれは一体何事であろうかと心底驚いたのであった。」(p. 131)

「1869年4月30日(金)、美しい町を昼に見ようと私たちはマルセイユにとどまった。2頭立ての馬車を呼び、町をほとんど見て回った。非常に広く、清潔で美しい、そして非常に美しく飾られた、言葉で言い表せないような多くの店を見た。商店街には泥や藁やごみが全く見られなかった。建物はみなとても清潔で輝いており、男女はとても清潔で身なりがよく、この上ない美しかった。」(p. 134)

「どの商店街もどの家、商店も美しい絵画のようであった。家や商店街の清潔さたるや、藁一本見当たらないほどであった。ごみなどどこにもなかった。パリの普通の商店街で見た清潔さは、話しても誇張だと思われるであろう。どの商店街でも昼夜何千もの、場所によっては何十万もの馬車や乗り合いバス、荷車、手押し車が行き交っている。何人の人が通行しているのか、数えることもできない。それなのに商店街は不潔ではない。動物の糞などは言うに及ばず、藁1本落ちていないのである。いつも清掃が行われているのである。2頭の馬に引かれた機械車を見た。大きなブラシの付いた、2ガズ(gaz長さの単位。1ガズは33インチ)はあろうかというローラーが付いており、街路を掃いている。泥や汚物は自動的に隠れた容器に集められる。いたるところに清掃員が配置されている。非常に繊細で美しいガス灯がどの街路にも数多くあり、近接して設置されている。店の主人たちが点けた照明によって明るいことこの上なく、パリの夜と昼とはまったく異なるところがな

いのである。」(pp. 150-151)

## (2) 文明化の度合い

アフマド・ハーンが見た西洋の国はイギリスとフランスである。両国の違いは意識されていたかもしれないが、旅行記では違いがあるとは記されておらず、どちらも文明の国として扱われている。ところが、非西洋に関しては、はっきりと西洋化の度合いに違いがあることが記述されている。アフマド・ハーンは、インド人は「不潔な野生動物」であると、「文明の西洋」対「非文明のインド」という図式に基づいてインド全体が後進的であると述べる一方で、インド諸コミュニティの文明化の度合いに差があること——ベンガル人やパールシーが最も文明化しており、北インドのヒンドゥーやムスリムの文明化が遅れていること——に言及して、こう述べている。

「ベンガル人やパールシーの兄弟たちがある程度文明的向上を始めたことはまことに喜ばしいことです。あまりにも疾走したので倒れこんでしまう恐れはありますが。同郷のヒンドゥーやムスリムの兄弟たちは未だに無知の街におり、ずっとそこにいることでしょう。おそらくムスリムは、発展の機会がなくなるまで、今の病が治療できなくなるまで、そこにいることでしょう。なぜなら、ムスリムは様々な無知にとりつかれているからです。父祖の話に囚われて、自分たちより優れた者はいないと思い込んでいるのです。眼前の庭園や咲き誇っている花々を様々な無知が見えなくしているのです<sup>18)</sup>。」(pp. 191-192)

アフマド・ハーンは、ムスリムにも地域によって文明化の度合いに違いのあることを認識しており、エジプトやトルコのムスリムが文明化しつつあることに次のように喜びを表している。

「インドのムスリム同胞が無知に囚われているとしても、他の国のムスリム同胞が文明的発展を開始したのを目にするのは大きな喜びです。エジプトとトルコ、すなわち、ルーム

<sup>18)</sup> 1870年2月11日付のメフディー・アリー宛書簡でアフマド・ハーンはインド・ムスリムの後進性をこう嘆いている。「ああ、インドのムスリムは溺れつつある。助ける者は誰もいない。ああ、霊薬を吐き捨て、毒舌をふるっている。ああ、手を差し伸べる者の手を振り払い、手を鰐の口に入れている。ああ、メフディーよ、ムスリムの口元にまで水が来ているということに思いを致すがよい。すぐに溺れてしまうであろう。君がここに来ていれば訓育がどのように行われているのか、子弟教育にどのような規則があるのか、知識がどのように獲得されているのか、どのように民族・国民 (qaum) が名誉を得ているのか、見て取ることができたであろう。帰国したらすべて語り、実行することにする。しかし、私のような異教徒、見捨てられた者、首をねじって殺した鶏の肉 (イスラーム法に従って屠殺されていない鳥肉ということ) を食べた人間、異教の書物を印刷する者の言うことを誰が聞くであろうか。」(p. 255)

メフディー・アリー宛書簡では、インド人一般ではなく、インド・ムスリムの発展がアフマド・ハーンの最大関心事として語られており、1870年4月22日付書簡では、ムスリム発展のための協会設立の必要を、同年4月29日付の書簡では、ムスリムのための学校設立の必要を訴え、同年5月27日付の書簡では、帰国後にはムスリムのために雑誌『道徳の純化』を出版するつもりであると述べている。ハーリーによると、1867年、ペナレスの有力なヒンドゥーの始めたウルドゥー語排斥運動、ヒンディー語公用化運動は、アフマド・ハーンに大きな衝撃を与え、「もはやヒンドゥーとムスリムは一つのコミュニティ (qaum) として暮らしてはいけない、両者を糾合して両者のために一緒に活動することは不可能である」と確信した、とアフマド・ハーンは述べていたという (Hālī, *op. cit.*, p. 138)。



（トルコ）のスルタンの支配下にあるムスリムは日々文明的発展をしています。きわめて喜ばしいことに、トルコのムスリムからは愚かさや無知に基づく偏見、その結果が恥辱でしかないような偏見が日々消えつつあります、否、消失してしまったとすることができるのです。」（p. 192）

### （3）ウルドゥー語による教育

アフマド・ハーンは、インドの文明化を達成するためには知識を——それは言うまでもなく、西洋の最新の知識である<sup>19)</sup>——インドの言葉で普及させなければならないと考えていた。

「インドの発展と進歩を本当に望んでいる者は、すべての知識が、高等から初等に至るまでインドの言葉でインドの人々に与えられることにインドの発展がかかっていることを理解すべきです。私の次の意見はヒマラヤの頂上に巨大な文字で将来への教訓として刻まなければならないなりません——『すべての知識がインドの人々にインドの人々の言葉で与えられないならば、インドは決して文明の段階に達することはない。これこそが真理である。これこそが真理である。』」（pp. 197-198）

アフマド・ハーンは次のように、イギリスの学問、技術の言葉が英語である点にイギリス人がインド人より優れている原因を求めており、知識の普及はインドにおいては英語ではなく、インドの言葉で行われなければならないのである。

「もし今、すべての学問、技術の言葉が英語ではなくラテン語やギリシア語、ペルシア語やアラビア語であったならば、今でもすべてのイギリス人は、残念ながらインドの我々が無知蒙昧であるように無知無学であったことであろう。自分たちの言葉が学問、技術の言葉とならない限り、我々は無知無能であり続けるであろうし、決して遍く文明化されないであろう。」（p. 100）

「イギリスの発展は、すべての学問、技術が、一般的に、あるいはほぼ一般的に話される、この国民の言葉に拠っていることに起因しています。イギリスには英語と呼べないような田舎の言葉がありますが、イギリスの英語は、インドにおける——特に北西州やビハールにおける——誰もが理解できるウルドゥー語のようなものなのです。」（p. 197）

<sup>19)</sup> アフマド・ハーンは、インドでウルドゥー語によって教育するための学問をロンドンの学者たちに選定させている。それらは次のように広範囲に亘るものであった。物理学、数学、力学、天文学、電気学、磁気学、光学、音響学、動物学、植物学、生物学、地質学、鉱物学、化学、論理学、倫理学、政治経済学、歴史学、地理学、文学など（アスガル・アッパース編集版に収録された、1871年1月6日付の *The Aligarh Institute Gazette* に掲載された「インド人教育に関する学問リスト」と題された文書を参照）。

アフマド・ハーンにとって、インドで最も普及している言葉——したがって教育において用いられるべき言葉——はウルドゥー語であった。彼は、ウルドゥー語に替えてヒンディー語を普及させようとする動きを次のように批判している。

「私はアラハバードからボンベイまで、村でも交番でも列車内でも政府の役人とも各部署の使用人とも各地の荷役人夫ともウルドゥー語で会話した。どこでもみな十分理解し、ウルドゥー語で応答した。いくつかの単語は何度も理解させる必要、大抵はかなり簡単に言い換える必要があったが、インド中でウルドゥー語がヨーロッパのフランス語のように理解され、話されていること、否、それ以上に普及していることには何の疑いもない。Allahabad Association<sup>20)</sup> が普及させたいと望んでいるような古い言葉 (qadīm bhāshā) は、探してみたが、何処にも見いだせなかった。」 (pp. 38-39)

プネーのグジャラーティー語を母語とする、ウルドゥー語を話すパールスィーとの会話を記録した部分でアフマド・ハーンは、グジャラーティー語はウルドゥー語の影響を大きく受けていると指摘し、次のように述べている。

「この言語 (グジャラーティー語のこと) がウルドゥー語にどれほど近いことか、どれほどペルシア語どころかアラビア語の単語を用いているか、よく見るがよい。Allahabad Association は一体いくつの地域のいくつの言葉からペルシア語の単語を除去して古い言葉を普及させようというのであろうか、何処に行っても私は驚くばかりである。実際には、現代のウルドゥー語が我が国の日常語 (vernacular) なのである。」 (p. 71)

以上のように、ウルドゥー語の普及ぶりを強調し、ウルドゥー語による教育の普及を訴えていることもアフマド・ハーンの旅行記の重要な点である<sup>21)</sup>。

#### (4) 西洋文明とキリスト教の分離

西洋を過剰なまでに讃美するアフマド・ハーンは、西洋文明とキリスト教の関係をどのように考えていたのであろうか。文書1の渡英記には、この点に関するアフマド・ハーンの考えをよく示す、キリスト教こそ正しい宗教であると主張するイギリス人とアフマド・ハーン、スエズに向かう蒸気船パローダー号船上での興味深い対話が記されている。

<sup>20)</sup> Allahabad Association というのは、1867年に設立された Allahabad Institute のことであろう。

<sup>21)</sup> 1882年、インドの教育状況を把握するために W. W. Hunter を委員長とする調査委員会 (Education Commission) がインドに派遣され、教育関係者に対して聴取が行われた。この時聴取を受けたアフマド・ハーンは、以下のように、インドの言語による教育ではなく、英語による教育の必要性を認めている。

“In 1854, when the dispatch was written (Charles Wood のインドの教育に関する通達のこと), India was certainly in a condition which might justify our thinking that the acquisition of knowledge through the medium of the vernaculars of the

「『マドラスの人に聞くと、世界にはヒンドゥー教、キリスト教、イスラームの三つの正しい宗教があると言うのですが、正しいと思いますか。』彼はこう聞いて自分でこう答えた。『正しくないと思いますね。正しい宗教は一つしかありません。』私は言った。『ええ、独自の教義に基づいている複数の宗教のどれもが正しいということはないでしょう。どれか一つだけが正しく、複数の教義のうちの一つだけが正しいでしょう。』これに対して彼は言った。『私はキリスト教だけが正しいと思います。』私は言った。『みな自分の宗教が正しいと思っていますよ。』彼は言った。『そのような理解は間違っています。』私は言った。『あなたの考えが正しく、他の人の考えが間違っているという根拠は何でしょうか。』彼は言った。『いいですか、キリスト教徒は多くのことを成し遂げました。イギリス人は全世界の人々の中で最も神の祝福を得ています。我々が持っている知識、技術を他の人々は持っていません。我々だけに神は知恵をお与えになったのです。この蒸気船を見てください——何という素晴らしい技術によって作られ、動いていることでしょうか。鉄道に使われている技術や鉄道の持つ力をあなたは十分ご覧になったことでしょうか。電報という素晴らしい技術をあなたもご存じでしょう。我々のような圧倒的な軍事力を持っている者は世界のどこにもいないのです。もし他の宗教が正しいのであれば、それにも神は同じようにお慈悲を垂れておられた筈です。』私は言った。『それらは世俗的なことです。それと宗教が正しいか間違っているかということは何の関係もありません。神はその善良な僕ヨブ、そしてその愛するイエスにこの世では何の地位もお与えにはならなかったのです。善良な僕たちにはこの世ではなく、来世に恩寵があるのです。』」(pp. 64-65)

以上のように、文明と宗教とは無関係であるというのがアフマド・ハーンの見解である。したがって彼の目から見れば西洋文明を受け入れるのには宗教的に何の問題もないのである<sup>22)</sup>。

アフマド・ハーンにとって西洋文明を受容することはキリスト教文化を受容することではなく、最も文明化した人間になることを意味した。宗教とは無関係の、最高度の文明を共有することによって西洋と非西洋の間の対立は消え、両者は兄弟として交流できるようになる、というのがアフマド・ハーンの見解であった<sup>23)</sup>。ヨーロッパと急速に文明的発展を遂げたトルコとの関係について彼はこう述べている。

---

country would be enough to meet our immediate wants. But now such is not the case. Vernacular education is no more regarded as sufficient for our daily affairs of life. It is only of use to us in our private and domestic affairs, and no higher degree of proficiency than what is acquired in primary and middle vernacular schools is requisite for that purpose; nor is more wanted by the country. It is English education which is urgently needed by the country, and by the people in their daily life." (G. F. I. Graham, op. cit., p. 217)

ニザーミーによると、アフマド・ハーンは、西洋の進歩の速度は極めて早く、翻訳に頼っていると進歩の速度についていけない、という内容の書簡をイギリスから出しているということである (K. A. Nizami, *Sayyid Ahmad Khan*, New Delhi, 1974 [reprint, originally published in 1966], p. 106)。もしそうであるとするなら、渡英中に教育用語は英語にすべきという考えに変わったように思われるが、ニザーミーはこの書簡の詳細について言及していないので、確認する必要がある。

「私はイギリスでエジプトのヘディーヴ<sup>24)</sup>を見ました。かつては憎しみ合っていた人々と友好的に会見し、行進に参加しているのを見たのです。ルーム（トルコ）のスルタンも隣国の人々と日々、友愛、協調、友好を深めています。数日前、無知の偏見が消えたことを示す大きな証拠が、ルームのスルタンがフランスとロンドンを訪問し、共に友好的会見を行い、会食のテーブルに連なることによって示されました。もう一つの大きな証拠は、フランス皇妃とオーストリア<sup>25)</sup>皇帝がルームを訪問し、スルタンの客となることです。このところルームでは接待のさまざまな準備が行われています。スルタン自身がフランス皇妃を出迎えるでしょう。皇帝たちは互いに1週間、兄弟愛をもって交わり、会合を行ない、会食するでしょう。彼らと一緒に旅行し、スルタンは客人たちをベツレヘム巡礼に連れて行くことでしょう。数日前、プリンス・オブ・ウェールズがルームのスルタンの客となっていました。トルコ中が興奮して次のような歌を歌っていました。『あなたの訪問は私たちの喜び。あなたの話は私たちには喜びの歌。』人間同士の友愛が深まり<sup>26)</sup>、無知と野蛮が減っていくのを目にするのは——それは自然の本来の目的です——、何と喜ばしいことでしょうか。」(pp. 192-193)

#### (5) 自助努力

イギリスの文明的優越性を支えているのは、イギリスの共通語、英語による教育であり、インドにおいても、共通語ウルドゥー語による教育を普及させてインド人を文明化することが急

<sup>22)</sup> イスマーイール・パーニーバツティエ編集の『ロンドン訪問者たち』に取められた文書6(付録5)の、ゴラクブルのミッシヨナリー・スクールで行った、ヴィクトリア女王生誕記念日での講演では、アフマド・ハーンは、以下のように、西洋文明はムスリム文明を発展させたものであるからそれを摂取するのには何の問題もない、という認識を示している。

「我が共同体(qaum イスラーム共同体のこと)の教育が素晴らしかった時代には我々にもこのすべての美点(人間の善良さ、そしてそれに基づく都市・商業の繁栄)があった。教育がおかしくなってそのすべての美点が我々から消えてしまった。我が共同体は一時期、学問において非常に発展し、寛大にもヨーロッパの人々に学問の恩恵を与えた。偉大な著述家たちは次のように述べている——もしムスリムが学問においてこのような発展を遂げず、学問によって実際には与えたような恩恵を他の人々に与えていなかったならば、今日、世界にはこれらの学問は存在していなかったであろう、と。コルドバの大学は、そしてバグダードの大学は学問を発展させて全世界に学問の太陽を輝かせたのである。」(p. 290)

「今日、その高度な文明で我々を統治するイギリス人は、これらの大学や学院の学問の光を享受した。今、偶然、我々と、かつて我々から知識を得、我々よりもさらに高い段階に達した人々(イギリス人)がこのインドで出会ったのである。」(pp. 290-291)

「彼ら(イギリス人)に借りを返してもらいたいと思う。彼らとその借りに利子を付けて返そうとしていることに私は心から感謝している。彼らは自分たちの努力と探求によって得た多くの知識を利子として我々に与えようとしているのに我々は偏見、無知、無能力ゆえにそれを受け取れないのである。」(p. 291)

<sup>23)</sup> インド人が文明化した暁にはインド統治に参画できるという見通しをアフマド・ハーンは文書6(付録5)で述べている。「インドでは我々はイギリス国民が得ているような、立法や他の国事に影響するような事柄に関する権利を得ておらず、インドの人々の意見は全く尊重されていないと人は言うことができる。私もこのことを否定しないし、このような問題があることを遺憾の念を持って認めるけれども、次のように言わなければ公正ではないであろう——このような問題が生じたのは、イギリス国民が得ているような権利を持つにふさわしい能力を我々が持っていないからである、と。我が国の人々がイギリス人と同じような能力を持ち、その能力を、イギリス人がその政府に対して抱いているような善意に基づいて用いるならば、疑いなく、すべての権利をこの国の人々は得るに違いない。或る偉大な著述家がこう言っている。『自由は国民の当然の権利であるが、この権利を持つことができるのは、それを正当かつ善意に基づいて行使するための能力がその国民に備わっているときである。』したがって、もしイギリス国民が持っているような権利を我が国の人々が望むのであれば、イギリス国民が持っているような能力を持つよう努力しなければならないのである。」(pp. 284-285)

<sup>24)</sup> アスガル・アッパース編集版では「エジプトの人たち」となっている。

<sup>25)</sup> イスマーイール・パーニーバツティエ編集版では「オーストラリア」と記されている。

務となっている、というのがアフマド・ハーンの旅行記の大きな主張であるが、アフマド・ハーンは政府に依存せず、自助努力によって教育を普及させようと考えていた。政府の力を借りずに建設されたクリフトンの吊り橋を見てアフマド・ハーンは以下のような感想を書き記している<sup>27)</sup>。

「この橋を見ると神の偉大さ、科学の力に心を打たれる。このような素晴らしい、見事な偉業を成し遂げた人々の偉大さが心に刻まれ、国王にすらできなかったであろうと思えるような事業を国民の志、心の広さ、技術が完成させたことを思うとき、この人々の偉大さが一層深く心に刻まれるのである。この橋が国王の城、貴族の館としてでも、父祖の廟、物故したラージャーの記念碑としてでもなく、ただ公共の福祉のために作られたことに思いを致すとき、見る者の心はどれほど感銘を覚えることであろうか——特に、自国の発展を望み、そのために自国民の虐げに耐えている者、自国民が利己主義や私欲、嫉妬、偏見の海にどっぷりつかっていると考えている者は（アフマド・ハーンのこと）。」(pp. 171-172)

「私は故国の人々にお伺いしたい——人間と言えるのはこの人たちなのか、動物のように私欲に耽っている私たちなのか。志ある人でさえ、事あるごとに政府が何とかすべきだ、少女たちを教育する算段も政府がすべきだ、少年たちを教育する算段も政府がすべきだ、宗教教育の算段も政府がすべきだ、と言うのである。ああ、穴があつたら入りたい。我々は文明化した国の人たちに顔向けできないのである。」(p. 174)

注意しておかなくてはならないのは、アフマド・ハーンの言う自助努力とは、政府の援助を拒否することを意味しなかったということである。1869年10月15日付 (*A Voyage to Modernism* では、1869年11月9日付) の科学協会事務局長宛書簡の、「(北西州) 知事閣下が(科学)協会を大いに援助して下さったこと、北西州公教育長閣下もまた大いに支援して下さったことを知って大変うれしく思い、神に大いに感謝しました」(p. 198) という言葉から解るように、アフマド・ハーンは政府の援助を拒もうとはしていなかった。彼にとって大事なことは、政府の支配下に入らないことであり——以上の言葉に続けて、アフマド・ハーンは科学協会事務局長ラージャー・ジャイ・キシヤンダースに呼びかけて、こう注意を促している、「親愛なるラージャーよ、(科学)協会と機関紙の自由を決して手放してはなりません」(pp. 198-199) ——、他者を頼らない、自立の精神を持つことであった。この書簡の中で彼はこう希望を述べている。

<sup>26)</sup> アスガル・アッパース編集版には「人間同士の友愛が深まり」の部分がない。

<sup>27)</sup> アフマド・ハーンは、友人に会うために、1870年3月1日から4日までプリストルに赴き、このとき、クリフトンの吊り橋 (Clifton Suspension Bridge) を見学した。この吊り橋は、1864年12月に完成した、プリストル近郊のエイボン峡谷に架かる鉄製の吊り橋である。

「インドの発展を願う者たちよ、誰にも期待してはなりません。自己を恃み、互いの献金によってすべての学問を、高等から初等に至るまで、インド中に自分の言葉で広めなければなりません。知識を獲得し、文明の段階に達すれば政府の職を望むことは無意味であると解るでしょう。いつの日かそうなることを切望しています。」(p. 198)

## おわりに

アフマド・ハーンの旅行記は、当時の旅の状況や経由地、滞在先の様子が細かく記述された渡航記録、滞在記録である。それは伝統的な比喩や誇張がほとんど出てこない、対象や印象、思想の的確な記述に重点を置いた散文で書かれており、ウルドゥー散文の歴史を考える上でも重要な資料であるが、本稿で見たように、思想性が極めて強く、インド・ムスリム啓蒙主義を代表する思想家アフマド・ハーンの思索の跡を辿る上で——アフマド・ハーンに思想的な影響を及ぼした西洋という存在が彼にとってどのような存在であったかを彼の感性レベルから知る上で——必要不可欠な資料である。